

葉集を読む

松岡 隆子

北窓を塞ぐあなたに夫の墓

矢作 裕子

矢作さんは山形県寒河江市に在住されている。北国の冬は厳しい。北窓を塞いだり目貼をしたり、霜除や風除や雪囲をしたり、欠かすことのできない冬支度、二年前までは二人でやっていた冬支度を今は女手一つでやらなければならぬ。北窓を開けた遙か向うには夫の眠る墓地がある。その窓を塞いでしまうと夫との対話ができなくなるようで切ない。(北窓を塞ぐあなたに)の後の一拍の間が、夫の墓への思いを募らせる。

後戻る道なき八十路冬木立

中川 敏

「80の坂を超えるのはきつい」とよく聞かされる。が、80歳を過ぎても元気で活躍している人は多い。「まだまだ、大丈夫ですよ」などと言うと、「あなたも80になったら分かるから…」と言われてしまう。確かに80歳になる時の気持ちは

70歳になる時との気持ちとは違って、心細くなったり気弱になったりするかもしれない。体に不調を来すことなどあるとなおさらだ。一度きりの人生であり後戻りのできない人生であることを感じるのも八十路ならではかもしれない。ならば、残りの人生を悔いなく精一杯生きようと思う。堂々と立つ冬木立のように。八十路とは暫し立ち止まって、来し方を顧み行く末を見据える路なのかもしれない。

掃きなれし方へと集め柿落葉

植田喜代子

今日も柿の木の下は落葉がいっぱいだ。色鮮やかな落葉に朝の日差が降り注ぎ美しい。見るのは綺麗だが、そのままにしておくわけにもいかない。風が吹こうものなら庭中に散乱し、路地に吹かれとぶこともある。箒で掃き寄せるものの、大きな葉は嵩張って厄介だ。毎朝のことでもいつも掃き寄せるところは塀寄りの木の根元。実感の一句である。

冬の夜の文いくたびも書き直す

橋本 素子

電子メールの普及により最近では手紙を書くことが少なくなつたが、書くべき手紙は書かなければならない。礼状や挨拶状に限らず、目上の人や大切な人には自筆で手紙を書くことが多い。いざ改まって書こうとすると、字を間違えたり歪んでしまつたりで、何度も書き直すことになる。私も度々経験していて橋本さんの気持ちがよく分かる。更けゆく夜の寒さが身に沁みることも……。